



Japan Society of
Women's Nephrologist

第7回JSWN総会 日本女性腎臓病医の会

日時：平成 21年6月5日

会場：ヨコハマ グランドインターコンチネンタル

ホテル3階「アトランティック」

特別講演

女性医師のキャリア育成システムは 何を目指すべきか？

海外事例から学ぶこと

大阪市立大学大学院医学研究科 病理病態学 教授 上田 真喜子 先生

Japan Society of Women's Nephrologist

先頃、第7回JSWN総会(代表世話人：原茂子先生、当番幹事：衣笠えり子先生)が横浜市において開催された。総会では、北海道、東北、関東、北陸、東海、関西、九州の各エリアにおける活動報告に続き、星井桜子先生の講演、上田真喜子先生の特別講演が行われた。

星井先生(国立病院機構西札幌病院小児科医長)より、地域活動報告に続き『予期せぬトラブルに学ぶ大会リスク管理』というご講演をいただいた。「女性医師の学会における活躍の場を広げたい」、「透析分野での小児科医の役割について認知度をあげたい」という目的で、昨年9月に札幌で開催された第14回日本腹膜透析研究会で大会長を務めたご経験から、大会運営の留意点などをご紹介いただいた。

特別講演では、上田先生(大阪市立大学大学院医学研究科病理病態学教授)より、女性医師が仕事と家庭・子育てを両立させて働き続けていくために必要な子育て支援システムの実現、それに向けた大阪市立大学医学部附属病院における取り組み、関連する海外事例の現地調査結果についてご講演いただいた。さらに男女の機会均等に基づいたキャリア育成システム、およびこれらを支える医学・医療界のコンセンサス形成の重要性についても貴重なご意見をいただいた。

共催：

JSWN (日本女性腎臓病医の会)
協和発酵キリン株式会社



特別講演

女性医師のキャリア育成システムは何を目指すべきか？

海外事例から学ぶこと

大阪市立大学大学院医学研究科 病理病態学 教授 上田 真喜子 先生

Special Lecture

Makiko Ueda



大阪市立大学医学部附属病院における取り組み

女性医師が能力を活かして長期にわたって生き生きと働き続けるためには、仕事と家庭・子育てとのワークライフバランスを保ち、仕事と家庭・子育て双方の喜び・達成感を実感できる就労環境や就労システムが必要です。

私どもは、5年ほど前から大阪市女性医師ネットワークを設立し、さまざまな活動を展開しています。このネットワークを活用し、大阪市立大学医学部附属病院では地域の医学部関連病院や市民病院群と連携しながら、子育てとキャリアアップの両立が図れる支援システムの構築を目指して、文部科学省の支援をもとに、女性医師・看護師支援センターを設置しました。同センターは、これまでに、院内保育所の拡充、母乳育児の推進、病児保育の開始、女性医師を対象にした柔軟な勤務制度の導入、地域連携システムの構築、女性医師・看護師のための復帰支援・復職研修の提供、製薬メーカー女性企業人との職域連携、など具体的な成果をあげています(表)。

アメリカ、スウェーデン、オランダの事例

本プロジェクトの一環として、2008年はアメリカ、09年にはヨーロッパ(スウェーデンおよびオランダ)で実地調査を行いました。

アメリカのカリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)には、6ヵ月～6歳児を対象とした定員約150名の附属保育所が設置されています。しかし、待機者が300名おり、医学部教員や医師の児の入所は実際上困難です。また、時間外保育や病児保育は実施されていません。また、UCSDのスクリプス記念病院・研究所の職員家族を対象とした保育所は、3ヵ月～6歳児を対象に午前7時～午後6時45分の保育を行っています。

保育料が月額約13万円と高額で、時間外保育や病児保育は実施していません。

UCSDの女性医師4名とのディスカッションを通じて感じたことは、アメリカでも日本と同様、キャリアアップと子育ての両立が困難なことが多いということです。カリフォルニア州では医師・看護師の産休は6ヵ月間までで、それまでに復職しなければ、病院との契約が打ち切られるそうです。近年、女性医師数が増加しており、20代の産科医では女性が9割を占めていますが、30代以降のキャリア形成やワークライフバランスについては不安に思うことも多いとの声も聞きました。

一方、スウェーデンでは仕事と子育てが両立できる支援システムが整っているとの印象を受けました。同国では教育費が無料であることに加え、夫婦で合計18ヵ月の産後育児休暇を取得することが決められています。男性は最低2ヵ月の育児休暇を取らなければならず、さらに現在、男性がより長い休暇を取得し子育てができるような計画が進行中です。なお、育児休暇中でも給与の80%が保証されています。こうした手厚い制度により、出産後も約80%の女性は働き続けています。地域の保育所は小学校と連結しているため子ども全員が保育所に入所でき、また子どもが病気のときには最長118日間、父母のどちらかが子どものための看護休暇を取得できます。日本に比べスウェーデンのシステムはかなり進んでいると感じました。

訪問したスウェーデンのカロリンスカ大学では医学部学生の6割、附属病院医師の約半数は女性です。また、同大学医学部教授の16%は女性ですが、さらに女性の教授や部長を増やす計画も実施中とのこと。

オランダのアムステルダム大学医学部でも学生の約半数は女性です。同大学メディカルセンターには26年前から保育所が設置され、3ヵ月～4歳未満の108名が入所しています(オランダでは4歳から小学校入学)。入所児の親の半数は医師、残りは看護師、技師などです。ただし、待機児が約100名いること、病児保育がな

表 大阪市立大学医学部女性医師・看護師支援センターのこれまでの成果

- 1 院内保育所の拡充
 - 1) 延長保育(朝 7:30～夜 20:00まで)
 - 2) 土曜日・休日の一時保育
- 2 母乳育児の推進
- 3 病児保育開始
- 4 子育て中の女性医師を対象に柔軟な勤務制度の導入
 - 1) 短時間勤務制度
 - 「医員」として雇用し、短時間勤務ができるようにする
 - 2) 当直免除・残業免除
- 5 女性医療人のための病児保育地域ネットワークの構築
- 6 女性医師・看護師の復帰支援
 - スキルシミュレーションセンターでの実技研修提供
 - e-ラーニングシステムを活用した自宅での復帰研修
- 7 女性医師と製薬メーカー女性企業人との職域連携シンポジウム

い点が親たちの悩みの種とのことでした。

オランダでは、産前6週、産後10週、計16週間の産休が認められています。また子どもが8歳以下の場合、男女とも勤務時間を通常の半分にするなど調整することで、育児休暇を取得することができます。また、フレックスタイムや週4日勤務などで、仕事と子育てを両立させている女性医師も多数います。しかし、地域の保育所や学童保育所の数が足りず待機児童が多いことに加え、オランダの小学校では児童が昼食を家庭に帰って食べることが伝統的であることから、両親の協力を得ながら、子育てをしている女性医師も多いとのことでした。

日本の現状を改善するためのヒントを得ながらも、アメリカやオランダなどでは、日本と同様の課題を抱えている現状がわかりました。

日本の女性医師キャリア育成システム改善のための提案

女性医師のキャリア育成には、個人のライフスタイルの多様性を尊重することを前提としながらも、仕事と子育ての両立をめざす女性医師に対しては子育て支援システムが必要となります。例えば、都会では市中の保育所に入所するのは困難なため、大学内や病院内の保育所に必ず入所できるような支援策が重要です。また、病児保育も必要で、小児科を設置していない病院もあることから、地域の病院群における病児保育連携システムを構築するなどの対応が求められます。また、子どもが小さい時の一定期間は残業や当直を免除する(または当直回数を制限する)などの勤務制度が必要ですし、フレックスタイム制や短時間勤務などの柔軟な就労形態の提供も求められます。そして、通常業務において夕方6時以降のカンファレンスやミーティングをできるだけなくすることも大切です。

最も重要なのは意識改革とコンセンサスの形成

子育て支援システムは場所とお金と人手があれば、ある程度は実現できるわけですが、さらにもっと重要なことがあります。それは、女性医師が医学の教育・研究・診療において男性医師と対等のキャリアアップができるように、医学・医療界のコンセンサスを形成していくことです。そしてそういうことが当たり前だという社会システムを作り上げていくことです。学会活動にしても、とくに若い女性医師たちに知的刺激を与え、キャリアアップや昇進を目指す気運を育てていくことが大切だと思われます。同時に、例えば、大学医学部や病院に「イコール・トリートメント委員会」を設置して活動するなど、女性医師のキャリア形成と昇進に関しては、男性医師と同等な機会の提供と同等な評価・待遇を行っていただきたいと願っています。

女性医師が今後ますます増えていくのは間違いなく、スウェーデンのようになるにはしばらく時間がかかるかもしれませんが、我が国においても女性医師がさらに活躍できる明るい未来が来ることを確信しています。



開催挨拶

第7回JSWN総会特別講演に寄せて

JSWN 代表世話人
虎の門病院

原 茂子 先生

Message from the Facilitator

Shigeko Hara



第7回JSWN (Japan Society of Women's Nephrologist) 総会では、特別講演として、大阪市立大学大学院医学研究科病理病態学教授上田真喜子先生にご講演をいただきました。

上田先生は、大学病院での女性医師のみならず看護師、さらに女性の研究職など医療機関で働く多くの職種の女性育成システムの立ち上げにかかわってこられ、これらに関する多くの経験をお話しされました。

また今回のお話では、海外における働く女性医療スタッフの育成システムはどのようにあるかなど、海外視察からの現状、さらには日本の事情との対比など、まさに広い視野からのお話に、会員一同は感激とともに、精神的に鼓舞されました。講演が終わられたあとも、熱気で感激覚めやらぬといってもよいほどでした。

大阪市立大学での育成システムの構築は、文部科学省からの研究支援を基盤に大学にはたらきかけて、支援センターを作られたとのことでした。大学の中で新しくセンターを築かれるには、それなりの多くのフリクションがあったのではないかと思います。

でしたが、そのあたりのご苦勞は一言もおっしゃらずに、さらりとお話しされました。

海外において医療施設で働く女性、とくに女性医師とともに看護師さんの取り巻く環境に関するお話もされました。上田先生の取り組みが素晴らしいせいでしょうか、海外での取り組みがそれほどでもなく、日本の方が環境的には恵まれているのではと思うことも多々ありました。まず現場から、一步一步立ち上げていくことの重要性を伝えられました。

最後に、一番大切なことを指摘されました。女性医師が、医学の教育、研究、診療において男性医師と対等のキャリアアップできることが重要であり、そのために医学・医療界へのコンセンサスの形成をすることなど、今後進むべき方向性を示されました。

やさしく、聴衆をつつみこむような温かさとともに、先を見据えて高い目標に向かって着実に歩まれているそのパワー、女性医師としての仕事に対する生き方、JSWNの今後の歩むべき道など、多くの示唆をいただいたご講演でした。

発行: 協和発酵キリン株式会社

www.kksmile.com

ESP0147A09L
2009年12月印刷